

【環境を考える】

命のつながり再生へ 生物多様性って？ <中> COP10 1年前に

2009年10月12日 中日新聞 中日新聞HP

風が吹けばおけ屋がもうかる - 。生物多様性を考える原点ともいえる「命のつながり」は、このことわざの世界に近い。

豊饒（ほうじょう）の海・富山湾の新湊漁協（富山県射水市）の取り組みはよく知られている。寒ブリやズワイガニなど海の恵みを守るため、海の男たちは、20年近く前から、近隣の山で落葉樹を植え始めた。

なぜか。秋になって落ちた葉は腐敗し、やがて鉄分ができる。この鉄分が、雨水や地下水に溶け込み、川から海へ。それを海藻や植物プランクトンがえさとし、またそれらを動物プランクトンが食べ、さらに小魚、大きな魚。食物連鎖のドミノである。

「植林を始めた時はなぜ漁師がと不思議がられた。次の世代まで漁業を守るためには、農業も林業も含めた全体で環境を考える必要がある」。昨秋急逝した矢野恒信・前組合長は生前、全国を回ってそう訴え続けた。

戦後の高度経済成長は山や海、川を汚した。ゲンゴロウやメダカ、トノサマガエル、クサガメなど、かつてはどこにでもいた生き物たちは姿を消した。

コンクリートで固められた川から、生活排水を浄化するヨシなどの水生植物が無くなった。排水の垂れ流しや埋め立てによって海からは、貝や魚などの産卵場となる干潟、光合成を営み浄化力もあるコンブなどの藻場が激減した。漁獲量は全国で減っている。

街を挙げた国の特別天然記念物・コウノトリの野生復帰の取り組みで知られる兵庫県豊岡市。ここでは、再生が街おこしにつながっている。

地元農家は6年前から、コウノトリのえさとなるカエルやバッタを生かすために「生き物を育（はぐく）む農法」を始めた。農薬はできる限り使わずオタマジャクシがカエルになるまで水田の水は落とさない、冬も水を張ってイトミミズを発生させる…。

水田には、バッタやクモ、タガメ、ドジョウなどかつて日常風景の中にいた生き物たちが帰ってきた。「育む農法」に取り組む水田は今や200ヘクタール超となり、市内の耕作総面積の1割弱にまで増えた。

舞うコウノトリも130羽を超えた。田んぼで収穫される「コウノトリ育むお米」は今年も330トンの出荷を予定する。5キロで3500円前後と決して安くはないが、例年飛ぶように売れている。

生命の連鎖を壊してきた人間の手で、再びそれを取り戻せるか。そこに、私たちの暮らしがかかっている。

【生物多様性の損失】 地球上に存在する生物種は3000万種ともいわれる。年間に絶滅する種は100年前は1種類以下だったが、1970年代には1000種に、現在は年4万種とも。その原因は開発や乱獲、外来種の持ち込みなど大半が人類による。この速度をいかに食い止めるか。国ごとに、その数値目標を定められるかもCOP10の焦点。